

絲綢之路

シルクロード

S I L K R O A D

2023-新春

No.101

●表紙の画および題字は、
故・平山郁夫画伯のご厚意により
ご提供いただいているものです。



流沙浄土変 1976年



【葡萄唐草模様について】

古代、ペルシャ、コーカサス生まれの葡萄が蔓草と一つになり、西へ、東へ、シルクロードを経て東西の文化を彩る文様となりました。私どもの財団ではシルクロードを中心に、世界の文化に寄与できればと、この葡萄唐草文様をシンボルマークにいたしました。

●シンボルマークデザイン：吉田左源二

公益財団法人

文化財保護・芸術研究助成財団

FOUNDATION FOR CULTURAL HERITAGE AND ART RESEARCH

日本のユネスコ世界遺産5

姫路城

（姫路城の連立天守群・国宝）



ユネスコ世界遺産（文化遺産）シリーズ

撮影・仙波志郎

姫路城は兵庫県姫路市の北側にある姫山および鷺山を中心に築かれた城で、江戸時代初期に建てられた天守や櫓などの主要建築が現存し、国宝や重要文化財に指定されている。

一九九三年、法隆寺地域の仏教建造物と共に日本初の世界遺産（文化遺産）に登録された。姫路城の始まりは、鎌倉時代後期から南北朝時代にかけての武将で守護大名であった赤松貞範（一三〇六〜一三七四）による築城とする説が有力である。今日見られる本格的な城郭となったのは、関ヶ原の戦いの後に城主となった池田輝政（一五六五〜一六一三）の手による。

姫路城は過去に何度か大修理が施されたが、近年では二〇〇九年から一五年にかけて「平成の大修理」と称された姫路城天守保存修理工事が世に知られるところである。

姫路城は別名白鷺城（または、しらさぎじょう）とも呼ばれるが、その由来には諸説ある。姫路城は幕末の動乱期に新政府軍に包囲されたり、第二次世界大戦の際には焼夷弾が天守に直撃したりしたが、築城後、一度も大規模な戦火や甚大な被害を被ることはなかった。

アジア漆の造形と祈り——漆は人を結ぶ

「漆樹」が生み出す摩訶不思議な樹液——漆。
 新たな文化を創り、産業を起こした
 特異な漆の世界と人々との関わりを見る。

東南アジアにおける 漆文化の発展

日本と東南アジアの漆工芸の関わりは十六世紀頃に遡る。日本の漆工芸の加飾技法に、「蒔^き」技法がある。漆器の表面に文様を彫り込み、色漆を充填し研ぎ出し、文様を表す技法である。かつて朱印船貿易による交易品として東南アジアから日本に伝わったとされる蒔^きが施された漆器が「蒔^き手」と呼ばれ、茶人に珍重されるようになり、やがて江戸時代後期の玉椿象谷（一八〇六―六九）により蒔^き技法が日本でも開発され、制作されるようになった。そして現在でも蒔^き技法は日本の漆芸作家によって用いられている。

東南アジア・インド・台湾などで、コショウ科の植物の葉にビンロウジ（檳榔子ヤシ科の木の実）と石灰を包んだものを噛む習慣があり、日本では「キンマ」と呼ぶ。タイ語で「キン（食べる）」と「マーク（実ビンロウジ）」といい、「ビンロウジを食べる」という言葉からきている。キンマを入れていた容器にこの技法が施されていたことから、技法名を「キンマ」と発音するよう



(写真1) カレン族の漆器

だ。ミャンマーのシャン州からタイの北部にかけての山岳地帯には、シャン族やカレン族をはじめ少数民族が居住している。そこでは竹や籐^{とうもろこし}を円筒型に編んで漆で塗り固めたキンマを入れる容器が制作され、現在でも山岳民族の村々で使用されている。（写真1）

東南アジアの漆器はクニツ^{クニツ}だけではなく、日常で使用する籠^{かご}や箆^{へら}などに漆を塗り、長きにわたり使用されてきた。仏教寺院や王宮などの建築にも漆が塗られ、

になったのだという。そのキンマを入れる容器とはどのようなものなのだろうか。ミャンマーでは「クニツ」といい、竹や馬の毛を編んで作られた蓋^{ふた}・懸^か子^こつきの円筒型の素地に漆を塗り重ね、蒔^き技法にて細かい文様を施すのが一般的



(写真2) ミャンマーの蒔^き漆器クニツ

金箔で装飾が施され、仏像や供物台などの仏具にも漆が使用されてきた。東南アジア各国では、信仰や風土に根付いた素晴らしい漆文化が脈々と育まれてきた。（写真2）

危機の中の漆産業

しかしながら一九九〇年代から東南アジアの漆産業は人々の生活環境の変化に伴い低迷の一途を辿っている。そして、コロナ禍による物流や経済の不安定な状

況が続く、インバウンドが断たれた産地や、情勢の不安定な国においてはその伝統の継承が危機的な状況に直面している。ミャンマー最大の漆器産地であるバガンには代々漆器作りに携わり、数十人の職人を抱える規模の大きな漆器屋も多数ある。ミンカパー村をはじめとするバガン地域の村々では漆器を制作する民家が並び、盛んに漆器生産が行われ、国内外の観光客が寺院の参道や漆器店で漆器を求める姿を筆者が訪問した際によく目にしたものだ。二〇一九年には「バガンの考古地域と記念建造物群」が世界遺産に登録され、今後ますます漆器産業が活気づくと期待していたところに、コロナ禍にみまわれ、国内外の観光客が見込めず、漆器産業が危ぶまれるような状況になってしまった。

さらに、二〇二二年一月一日に起こった軍事クーデターにより、民主政権を支持する国民のデモや抗議活動がミャンマー全域に及び、多数の犠牲者が出る混乱した状況が今も続いている。

アジア漆工芸学術支援事業は、二〇〇五年より、漆工芸が直面している現状を見つめ、新たな創造とともに未来へ伝えていくことを目標とし、東南アジア各国との漆工芸を通じた交流活動を行ってきた。昨今のプラスチックごみによる環境汚染、温暖化による世界的な環境変化の脅威が看過できない状況にある中、天然素材である漆は現代社会に多くのことを提案できる



(写真3) 来日した作家とともに



(写真4) 祈りの造形

る作品も展示し、各作家の漆への想いや独自の表現の追求を展開した。会期中、ベトナム・タイ・欧米から作家十一名が来日し、ギャラリートーク、パフォーマンス、茨城県太子^{だいご}への植栽地見学など活動は多岐にわたった。対面と同じ体験を共有できる喜びはひとしおである。（写真3）

筆者略歴
 一九六五 東京都生まれ
 一九九一 東京藝術大学大学院美術研究科漆芸専攻修了
 現在 国立大学法人宇都宮大学教授、アジア漆工芸学術支援事業主宰、日本文化財漆協会常任理事。
 漆造形作品制作活動を行う傍ら、アジア各国を訪れ現地の漆工芸調査や交流活動を行っている。
 国内外の美術館・ギャラリー・アートフェア等での作品発表多数。

漆に託す未来への夢

元来、東南アジアでは日常使用する箆や籠などを長きにわたり使用するために漆が用いられてきたが、それだけではなく「祈り」の場面で使用されてきた。この三年間全世界の人々が翻弄されたコロナ禍に加え、軍事クーデターや戦争で、漆工芸に携わる人々の中には、不条理な状況に立たされている人も少なくない。今、「祈り」の場面で使用されてきた漆の造形を通して、それぞれの国に生きる人々が漆をどうとらえ、この時代をどう見つめているのか、新しい漆表現の挑戦と交錯を試みる取り組みとなったといえよう。東南アジアの漆芸の伝統と現代のつながりを噛みしめつつ、多様な装飾の素晴らしさと造形の可能性、さらに漆の作品が発する静寂さと深遠さ、日本と各国との相互理解、平和への祈りのメッセージを伝えることができたならば幸いである。そして次世代を担う工芸家たちが、互いの国を行き来し、未来について夢や希望を語り合うことができる平和な日が訪れることを願ってやまない。漆は人と人を結びつけてくれるのだ。数百年前に東南アジアからはるばる旅をして日本へ伝わった蒔^き手に思いを馳せながら…。（写真4）

金属工芸——「鑄金」とともに

ちゅう きん

熔解した金属を「芸術」という
力とともに鑄型に流し込む。
そこから生まれる「生命感」の感動を語る。

東京藝術大学美術学部教授
赤沼 潔
(あかぬま・きよし)



感謝の念を込めて 退任記念展を開催

二〇二二年十一月三日から十一月十三日までの十一日間、東京藝術大学美術館陳列館において「Rebirth」というタイトルのもと退任記念展を開催することができた。東京藝術大学に着任してから十七年間の総まとめの展覧会となった。この展覧会のために二年前ぐらいいから構想を練り、制作を続け、先日無事に展覧会を終了した。新型コロナウイルスが収束しない中、三〇〇人を超す来場者があったことは嬉しい限りであった。



退任記念展の制作

過去、現在、そして未来にむけて

会場には、陳列館の一階に新型コロナウイルスが蔓延する前まで制作していた過去作を展示し、二階には新作を展示した。

一階部分の過去作は、植物の生命感を自作に重なるように制作した作品が多く、また、一堂に展開したことも初めての試みであったが、会場から受ける印象は、それぞれの作品が共鳴し合い親しさを感じるものであり、このような新鮮な感覚を得ることができたことは驚きであった。作品一個ずつでは表現しきれなかったと思っていたことも、作品の傾向が多岐にわたり、それぞれの要素が渾然一体となって、会場全体に柔らかな印象をもたらせていたことも収穫であった。



退任記念展会場一階



退任記念展のセッティング

で、鑄造に適したアルミニウム合金に調整して使用したものであるが、震災の記憶を素材を通して表現することは、工芸の領域の新しい分野になると直感しての制作であった。

二階全体に「Rebirth」のもとアルミニウムの鑄物のみを用いて脈々と生を育み続け昇華していくことの表現とするため、できるだけ余計な要素を削ぎ落とした。まずは、床面のフローリングの板目を消すために、一面に赤のマットを継ぎ目が見えないように敷き詰めた。この赤の色は、アルミニウムの鑄物の色を効果的に発色させることを意識したことで、アルミニウムを熔解することによって発生する熱を感じてもらふこと、そして震災で犠牲となった方々のイメージを重ねての選択であった。

ここで使用したアルミニウムの鑄物は、全て私一人で鑄造し完成させたものである。鑄物自体は鑄物工場に発注することも可能であるが、自身の手で一本一本制作することが震災からの復興にも通ずるものがあると信じていたこともあった。また、鑄物を制作するときに発生する鑄バリ*も重要な要素であったため、鑄物を確認しながら鑄バリを発生させることは自身で制作しなければ実現化は不可能で

あったと思う。

会期中、いろいろな方からお言葉をいただき、まだまだこれからも制作していこうと思うエネルギーをいただいた。

私の「鑄金」人生

私の「鑄金」との出会いは大学に入ってからであった。学生数人で画廊巡りをしている時に当時の鑄金の教授であった原正樹（一九三五―二〇二一）先生とお会いし、一杯行こうということになり、そのまま原先生のご自宅まで同行し、先生の鑄物の作品をいろいろと拝見できる機会があった。その中でブロンズが美しい青を発色してその形体を特に印象付けている作品に不思議な魅力を感じ、鑄物の作品を自分でも作ってみたいと感じたのが始めた。

最初は学ぶことが多すぎて混乱している状況であったが、年を重ねることに少しずつ鑄物のことが身につき、現在ではいろいろな面で鑄物的思考になってきた感がある。私は特に金属を熔解する場面が大好きで、常にその場にいたい衝動に駆られる。熔解時の轟音とともに形が次第に変形し、固形物から熔融状態になったところ



退任記念展会場二階

ろで精錬作業をし、注湯（熔けた金属を鑄型に流すこと）となる。この時は熔解のための送風を一切止めるため、深い静寂が周りを包み込む。みんなで呼吸を合わせ、一気に鑄型に湯（熔けた金属）を流し込む。静から動へ。この瞬間に金属に次の形体の命が吹き込まれ、新しい鑄物の造形の誕生となる。このドラマティックな仕事から離れられなくなった。

筆者略歴

一九五六年 宮城県生まれ
一九八三年 東京藝術大学大学院美術研究科修了
一九九四年 長岡造形大学造形学部 産業デザイン学科 助教授
二〇〇一年 長岡造形大学造形学部 産業デザイン学科 教授
二〇〇六年 東京藝術大学美術学部 助教授
二〇〇七年 東京藝術大学美術学部 准教授
二〇一三年 東京藝術大学美術学部 副学部長
二〇一三年 東京藝術大学美術学部 教授
二〇一七年 寧波大学（中国）客員教授



鑄造の様子

鑄物を通して多くの人との出会いもあった。特に学生との触れ合いは貴重なものであった。寝食をとるに同じ目的に向かって過ごす時間は魅力的であり、刺激的であった。特に吹き（鑄造すること）の後の後吹き（鑄造に協力してくれた人々へ感謝の酒席）では、馬鹿な話もあったが、技術論や人生観にも話が及び、お互いの接点が強固になった貴重な時間であった。ただし、新型コロナウイルスが蔓延してからそれまでなくなり、鑄金研究室全体の統一感も薄れ、個々での展開を余儀なくされている現状は残念であり、早く以前の姿に戻れることを熱望するものである。

*鑄物において鑄型と鑄型の隙間に流出し溶融した金属がはみ出し、凝固した薄い余分な出っ張り。

文化財学のススメ

文化財を守ることは、
なぜ大切に重要なことなのか……。

はじめに

私はいま、奈良大学文化財学科で教員として働いています。これまで、『絲綢之路』には、日中共同事業に関する文章を掲載させていただいてきました。今回は、「文化財学を学ぶ」ことについて、奈良の地で考えていることを書かせていただきます。

美術史研究から文化財研究へ

私は、大学で日本仏教彫刻史という狭い領域の美術史を学びました。大学院へ進んだ一九八〇年代初期は、中国が外国人留学生の受け入れを開始して間もなくの頃で、私は一念発起し、幸運にも二年間、北京で学ぶ機会を得ました。やがて国立博物館に学芸員として就職し、後に文化財研究所（東京）の研究員になりました。九十年代は中国の仏教彫刻の研究に明け暮れました。今世紀に入って、中国・龍門石窟を対象とした日本信託基金ユネスコ文化遺産保存修復事業に東京文化財研究所の一員として参加したのを皮切りとして、中国を中心とする外国文化遺産保護の国際協力事業のマネ

ジメントを十年間担当しました。龍門石窟は、かつて修士論文のテーマとして以来、初唐時代の仏教美術の展開を説き明かすために心血を注いだ場所でした。そこが、私にとつての新しいスタート地点となったのです。それにしても、いまとなつてはまことに恥ずかしいことですが、私はこの時はじめて、文化遺産の意味、文化遺産を後世に継承していくことの大切さと難しさを学びました。そして、文化遺産保護に関わる多様な分野の専門家と知り合いました。（公財）文化財保護・芸術研究助成財団との直接の関わりもこの時に始まりました。龍門石窟研究院の人材育成及び高精細デジタル撮影プロジェクト・敦煌莫高窟の壁画保護を通じての日本の若手研究者育成・陝西省唐代陵墓石刻保護事業・シルクロード人材育成プログラム



シルクロード人材育成プログラム 2007年



シルクロード人材育成プログラム 2008年



奈良大学文学部
文化財学科教授
岡田 健
(おかだ けん)

平成二十三年（二〇一一）、東京文化財研究所の部長職となる直前に東日本大震災が発生し、役割を与えられて被災文化財救援事業（文化財レスキュー事業）の救援委員会事務局を担当しました。私はそれまで、二〇〇八年の中国・四川汶川地震に対する文化庁の支援事業（調査及びシンポジウム開催）を担当したこと

はありましたが、それは主に歴史的建造物の防災に関する内容を扱ったもので、被災文化財の救出活動については知識も経験ありませんでした。私は、一連の実践活動を通じて、ようやくその方法を知っていたのです。もちろんそこでも、多くの方々との出逢いがありました。以来、文化財防災が私のテーマとなりました。

このように、多くの機縁によって、私はこれまで文化遺産・文化財に関する多岐にわたる仕事に参加してきました。それによって美術史という一つのジャンルにいたるだけでは見ることのできない、多様な文化遺産・文化財の捉え方を知りました。

文化財と社会

文化財はただ歴史や文化を物語る過去の遺物としていまにあるわけではありません。文化財は、そのほとんどがかつて儀式や遊戯、趣味など、何らかの「おこない」に用いられた道具でした。建造物はその「おこない」や生活の場でした。しかし、最初の形態をそのまま維持しているものはむしろまれで、使用し遺し続けるための必要によって改変が加えられているものがほとんどです。傍証とすべき資料が残っているものも多くはありません。このため、今日文化財の中にはその歴史的価値や材質・構造・様式などの優秀さを認められ、指定文化財として位置づけら



夏の法隆寺

る文化財として位置づけら



大学博物館での博物館実習

れるものもありますが、本来の姿かたちや使い方、制作者・所蔵者・来歴などのすべてが分かっているというものは、むしろほとんど存在しない、と言っても過言ではないのです。

一方、保護の方法や考え方は、経過してきた時代の「技術」や「価値観」の変化によって異なります。現在の文化財研究は、今日まで人びとによって守り伝えられてきた文化財について、それが制作された時から今日までの歴代の技術や価値観の移り変わりを解明しつつあります。その結果、途中の改変が合理的なものであると分かった場合には、必ずしも最初の姿にこだわることなく、現在の形態のままで後世に残す、という選択が行われます。この選択を行うためには、周到で的確な文化財研究と判断が必要です。それによって、我われは文化財を通して各時代の「技術」や「価値観」を見ることができるようになります。

「技術」はそれ自体が文化です。文化財の修復のための材料の調達、当時の産業や経済流通の状況を反映しています。例えば膠や漆などの伝統的材料は、かつてその需要があった時代には大量に生産されました。しかし、生産者が激減した今日においては、代替材料の開発が促進され、それが結果的に新しい文化を形作る基盤となります。歴史は、それを繰り返してきたのです。

文化財に対する「価値観」は現在の社会そのものを映し出す。このような認識をもって文化財を見てこ

文化財学のススメ

そ、文化財が文化財として今日存在する理由が分かります。さらに、未来にわたって守り伝えていくべき存在としての理由が理解され、方法が考案されるのです。すなわち、文化財保護はそれ自体が新たな文化の創造であると言いうことができます。これが文化財の本質です。

私は、大学は、このように文化財を理解し語ることのできる人材を育成し、社会に輩出していかなければならないと考えます。

平成三十年（二〇一八）十月に文化財保護法が改正されました（同三十一年四月施行）。この改正は、①文化財の保存・活用のための計画制度の創設、②多様な担い手の参画に向けた体制整備を柱としています。これに対して「文化財の活用」ということがクローズアップされ、「文化財保護法は保存から活用へ舵を切った」と言う人がいます。この理解は正しくありません。

これまで述べてきたように、文化財保護は、多岐にわたる研究を通じて、その「価値」の変遷を発見し、保存の方法を講じ、そこから新たな創造を生み出すものです。このような研究こそが文化財の多様な可能性を引き出すのです。

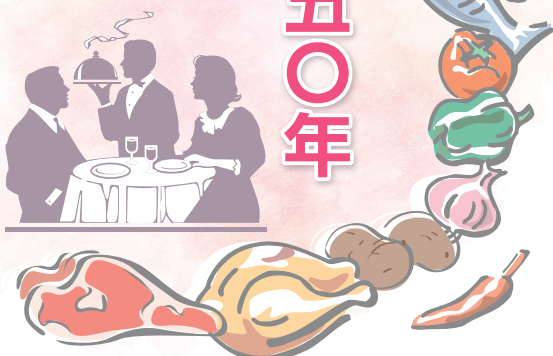
「保存と活用」の議論において、最も欠落していることは「研究の重要性」です。研究を通じて文化財の「技術」と「価値」を発見し、歴史的観点と今日的視線をもって文化財を語る人材を作る。このような考えから、本稿のタイトルを「文化財学のススメ」としました。

筆者略歴

奈良大学文学部教授
奈良国立博物館、(独)国立文化財機構東京文化財研究所に勤務し、令和三年四月から現職。
文化遺産論が専門。



「精養軒」の歩みに見る 日本の食文化における洋食の一五〇年



精養軒の誕生

おかげさまで、おまちして精養軒は昨年、創業一五〇年を迎えることができました。

弊社が創業した明治五年（一八七二）という年は、新橋、横濱間で鉄道が開業。日本初のガス燈が横浜で

灯り、群馬県の富岡製糸場が操業を開始しました。また、従来の旧暦から西暦（グレゴリオ暦）への改暦があった年にもなります。



現在の上野精養軒・外観

そして、西洋料理の草分けとして創業した弊社から見て、興味深い出来事は肉食の解禁です。飛鳥時代にあたる西暦

明治の御世と共に肉食が解禁。
日本人の食生活に大変革をもたらした
洋食の登場の舞台裏には……。

六七五年以降続

いてきた天武天皇

が定めた肉食

禁止令に事実

上、終止符が打

たれたのです。

この年の一月、

明治天皇自ら今

後は牛肉を食す

ことにした、と

いう記事が新聞

で大きく報じら

れ、これを機に

食の近代化に向

けた大きな一歩が刻まれました。

明治維新を迎え、近代化の足音が聞こえてきた明治五年二月二十六日、右大臣岩倉具視の支援を受けた創業者北村重威（一八一九〜一九〇六）により、精養軒は丸の内・馬場先門前に開業。しかしながら、開業当日に銀座座の大火により焼失、苦難の道となりまし



図① 創業期の築地精養軒（采女町）

上野精養軒開業と 明治天皇皇后の行幸啓

明治六年一月、公園設置の太政官布達により上野公園の整備が始まりました。内務卿大久保利通の発案により、岩倉公を通じて上野公園への出店を求められた北村は、開業したばかりの采女町の店だけでも収支が覚束ない状況であり、更に上野の山の中——当時の上野は白昼狐狸が往来するような場所でした——に

開業したところで、と一度はこの話を謝絶しました。しかしながら、帝都を代表する公園の開設にあたり、来遊する外国人に料理を提供することができない有様では面目が立たないので、どうか経営をしてもらいたいという岩倉公の説得もあり、公園への出店を受けることにしました。

その後、不忍池を見越して富士山を望む随一の眺望を誇った「猫塚」という場所を選定し建築を始めますが、上野戦争の直後で荒らされたままの敷地からは、人や馬の骨、弾丸の破片などがどれほど出たか分からなかったと、当時の苦労話も残しております。明治九年五月、上野公園の開園に合わせて「上野精養軒」が開業。明治天皇皇后の行幸啓のもと開園式典が挙行され、上野精養軒もレセプション会場となりました（図②）。

明治十二年、アメリカ南北戦争の英雄であり、北軍の司令官として名を馳せ、第十八代アメリカ合衆国大統領ともなった、ユリシイズ・S・グラント將軍が来日。同年七月八日、岩倉邸で行われたグラント將軍歓迎会の料理は精養軒が請け負いました。この時のメニューが現存しており、弊社で確認できる最古のメニューです。



図② 東京上野公園開行幸之図（※画像右端の建物が精養軒）



図③ 上野精養軒新館竣工パーティー（昭和34年）
※右側の建物が旧館



図④ 築地精養軒ホテル（明治42年落成）

共に、歴史的なイベントの一翼を担ってまいりました。また、築地・上野に加え、「東京ステーションホテル」や「松島パークホテル」といったホテル業、東海道線の列車食堂、日本初のビヤホール「恵比寿ビヤホール」

その後の精養軒と現在

明治二十三年三月、上野公園で開催される第三回内国勸業博覧会のタイミングに合わせて新築された建物が上野精養軒の「旧館」で、外国賓客向けのホテルも併設されました（※ホテルは大正六年の台風で倒壊するまで存在）。この「旧館」は宴会場の増改築等を経て、昭和三十四年の「新館」建替まで存在しました（図③）。一方、築地精養軒も明治四十二年に新築され、地上三階建ての大型ホテルとして生まれ変わりました（図④）。森鷗外作品「普請中」は、この建築中の築地精養軒ホテルが舞台となっております。

本格的な西洋料理店としてスタートした精養軒は、レストラン、ご宴会、ご婚礼・ご披露宴、出張仕出し事業等で官民を問わず多くの皆様にご利用いただくと

を前身とする「カフェー・新橋」、銀座の「カフェー・ライオン」等の経営にも携わり、飲食に関連する様々な事業の拡大・多角化を進めてまいりました。一方で、関東大震災に伴う築地精養軒を含めた営業所の焼失、昭和恐慌による経営危機、根津財閥による再生支援、その後の第二次世界大戦、高度経済成長、バブル経済とその後の崩壊、東日本大震災による大きな落ち込みも経験いたしました。一昨年には新型コロナウイルス感染症の世界的感染拡大に直面し、飲食業界では大変厳しい状況が続いております。

精心養氣

古い錦絵などには「西洋軒」と描かれている場合もありますが、弊社の屋号である「精養軒」の由来は、「精心養氣（真心のこもったおもてなしで、お客様に浩然の氣をやしなっていたら）」という言葉をつづめたもので、明治の三筆の一人と称された書家・漢詩人の巖谷一六（一八三四〜一九〇五）が命名したと言われております。

現存する最古の西洋料理店として一五〇年という新たな節目を迎えた弊社ですが、屋号の元となった「精心養氣」の精神と伝統の味を継承しつつ、「より良い内容・より良いサービス」の社訓を忘れず、社員一丸となってこの難局を乗り越えてまいります。

今後、皆様の一層のご指導とご愛顧を賜りますようお願い申し上げます。

筆者略歴

昭和二十六年東京生まれ。法政大学卒業後、昭和四十九年株式会社精養軒入社。本社経理部、上野本店宴会営業、営業店支配人等を経て、平成十七年取締役就任。平成二十二年代表取締役社長就任（現在に至る）。

